

ローション タッグマッチ

山牧田 湧進



まえがき

【ご注意ください】

- この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- この作品は表現の誇張、強調や、省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- 特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

藤橋がよくお世話になっていた他団体の代表、武本から久し振りのオファーが届いた。

二人は相思相愛でありながら、お互い気付かずに年月だけが経過してしまっていた。

武本は藤橋似でやや小柄な団員と付き合いながらも、藤橋のことが諦めきれずにモーション掛けようと企んでのオファー。

藤橋はファンから同じ団員となった誠太と付き合いつつも、リング上では常に敵対する立場にならざるを得ないことから、他団体への出向なら敵対せずペアになれると考えタッグを提案。

微妙に噛み合わない思惑で迎えた試合はローションタッグマッチ。

武本は藤橋の変化と誠太の態度から確信を持ち、かつてない大胆なモーションを仕掛ける。

ローション塗れでぐっちゃんぐっちゃんに組んず解れつした挙句、藤橋を全裸にひん剥く武本。一人スポットライトを浴びながら超完全勃起を観客に晒してしまふ藤橋。

試合後のリング上で、武本はタチ一人ウケ一人、相手指定、先にイカせた方勝ちのタッグマッチ延長戦を布告するが、躊躇する藤橋より先に武本への嫉妬に燃える誠太が応戦宣言をしてしまふ。

【主な登場人物】

・ 藤橋 裕太（ふじはし ゆうた）

物語上の一人称「俺」。知名度が今一つである弱小プロレス団体『天辺』の代表。正統派ヒーローの主役プロレスラーでもある。風貌が似合わないのでベビーフェイスとは標榜していない。あっちもこっちもあそこもゴロンゴロンで、本人も芋を自覚しているが強いコンプレックスにもなっている。意外と奥手で誠太とデキるまで経験は僅か。しかし、おもちゃでの自己開発は十分に進んでいて、尻は熟練の極み。

・ 野辺院 誠太（のべいん せいた）

物語上の一人称「僕」。元藤橋の大ファン、現藤橋と敵対する悪役のプロレスラー。リングネームは『フランク狩断印』。目のすぐ上に庇のように出っ張る大きな額が目つきを悪く見せてしまうことが多く、これさえなければ藤橋以上に正統派ベビーフェイスとして相応しい逸

材。若さのわりに経験豊富そう、かつ、実際に上手なタチ。藤橋にち
らつく男に対して異様に嫉妬の炎を燃やす。芋大好き。

武本 真司（たけもと しんじ）

物語上の一人称「俺」。藤橋の団体経営が不安定だった頃によく助け
舟を出していた団体『TKTCS』の代表。年齢も背丈も若干上の兄貴。下
心込みで藤橋の面倒をよく見ていたが、藤橋にはノンケと見られてい
た模様。藤橋への想いを捨てきれないまま、風貌が少し似ているタチ
の団員と付き合っている。そう、藤橋に抱いていたイメージはタ
チ。ってことはこちらも熟練のウケである。

【目次】

第一章	ヒーローとヒーラーのタッグ	8
第二章	真ん中ドラゴン、芋好き誠太	17
第三章	ローションタッグマッチ	39
第四章	試合終了は延長戦の始まり	60
第五章	グジュグジュ時系列	75
第六章	一人勝ち絶対王者	88
第七章	下心200%	98

第一章 ヒーローとヒールのタッグ

「おおお」

スマホを手に、俺は思わず声を上げていた。

「どうしたんですか？」

練習場を掃除していた野辺院誠太（フランク狩断印しゅたいんの本名）がちょうど通りすがりだったらしく、雑巾を持ったままこちらに近付いて来た。

「いや、久しぶりのお誘いが来た、と思っただけ」

「何のお誘いなんです？」

「プロレスの試合。うちが昔、経営が安定していなかった頃、よくお世話になっていたんだあ」

「へえ、そうなんです。僕がまだ藤橋さんを知らない頃の話ですかね。知ってたら見に行ったはずだもんなあ……」

「そうだ！」

俺は閃いて、突然大声を上げた。左斜め上に顔を振って、誠太を見上げる。（相変わらず可愛いな。特に見上げる角度は格別なんだ。）

「狩断印も出てみないか？」

（練習やなんかでも観客やら部外者が居ることも多いから普段からリングネームで呼ぶように徹底してるんだ、一応。）

俺はその先の誠太を想像して、少しニヤニヤしながら問い掛けた。

「はい、藤橋さんがそうおっしゃるなら、出させていただきますけど……」

誠太はまだ今一つ要領を掴んでいない感じで、当たり障りのない返答をしてきてる。

俺は右手で緩いコの字を作って口鼻の脇に当てて、内緒話風を装ってみる。

その俺の様子を見て少しかがんで顔をやや近付けた誠太に、

「タッグ組めるかもよ」

あまり小さな声にはしなかったが、わざとボソボソとした棒読み口調で話してみる。

その瞬間、誠太の顔がぐんとぶつかりそうな勢いで近付いてきた。

「本当ですか!？」

「ああ」

「タッグって、藤橋さんとチームが組める、ってことですよね!？」

誠太が身を乗り出しながらも、しつこく確認をするのには訳がある。

誠太は元々、俺のファンでいてくれてた奴で、俺を慕って入団希望までして来てくれた奴だ。

だけど、誠太の奴、基本はハンサムだし甘めマスクの好青年なんだけど、ちよつとおでこが大きくて目のすぐ上で出っ張っているんだ。そのせいで鋭い目付きが悪く見えることが多くて、それで奴はヒール（悪役）担当になっちまった。

俺はその正悪の区切りで言うところ正義（ヒーロー）の側だから、俺と誠太がタッグを組めるということはまずあり得ないんだ、残念ながら。

……だけどそれは、うちの団体『天辺』（てっぺん）の中だけの話。

外部団体に少人数で出向くだけならうちの団体の設定とか関係なく行けるから、別に誠太がそこでもヒールをやらなければならぬなんていう制約は無いのだ。

だから、外に出向くときだけは俺達はタッグを組める。そういう訳だ。

「ちょっと提案してみるよ。まあ、却下されたらゴメンな」

「いえ、是非、よろしくお願いします！」

誠太の返答には目一杯力が籠っていた。

提案してみたたら、割とあっさり『こっちもめぼしいの一人選んどくわ』って回答が返ってきた。

練習生も交えた団体の皆が居る食事の場で結果を誠太に伝えると、奴は拳振り上げてガツポーズしながら立ち上がるうとしたみたいだけど、ご飯溢しそらになって途中で半端に止まっていたっけ。

俺ら二人だけのためにうちの団体全体が休んじやうと却って経営的にマイナスになってしまふから、自分達だけが休日出勤みたいに休み減らして行くことになっちゃったけど、誠太はずっとニコニコしてた。俺もただよ。

付き人要らない、休んでくれ、って言ったんだよ。

だから、今回の出向は俺と誠太の二人きり。

仕事だけど、小旅行のデート気分でもあるんだ。

そう、俺達、ありがたいことに、デキてます。

ちよっとしたアクシデントがあつて、謝られて、告られて、そのままなし崩しのにデキちゃった。

普段、誠太は俺を敬ってくれているんだけど、アノ時だけはあいつがトップ。俺は良いようにされるがままだ。ま、俺は確かにボトム（受け）なんだけどき。

本来、うちの団体ではリングネームのある奴は普段からリングネームで呼ぶ、って仕来たりにしているんだけど、あのとき以来、俺は勝手に心の中では

『誠太』って本名で呼んでいる。自分が作った決まりを自分で破っているんだ

けどな。

でも、それも……

出向の打ち合わせをした夜。

「どんな展開にするかとか、もう決まっているんですか？」

「いや、それが、『細かい打ち合わせは不要だから当日現場で話す』、って言われててさあ」

「へえ、そうなんですか」

「でも、トリだってさ」

「へえ、そんな大役を。僕なんかで良いんですかね？」

「ああ。それよりさ、向こうでの試合のときの話だけだよ、うちの団体の設定を引き摺る必要なんか一切ないんだから、『フランク狩断印』じゃなくて『野辺院誠太』で出ないか？」

「ええ、良いですよ」

「それじゃ、誠太。向こうの試合の話のときは『誠太』って呼ぶからな？」

実は俺、これを狙ってただけだったりして。

「あ、はい、お願いします。藤橋さん」

はああ、やつと普通の呼び名でラブラブな会話ができるぜ。

「そいでさ、なんでか知らないけど、『コスチュームは汚れても良いようにあまり手の込んでないものにしてくれ』とか言われてるんだよ。わざわざ言うてくるくらいだから、普通の試合やる以上に汚れるってことなんだろうけど、何やるんだか教えてくれなくてさ」

「それも当日？」

「うん。だけど、まあ、うちのコスチュームもそんなに手が込んでるってほどでもないけど、それ以前にほら、いつものだと、ヒーローとヒールじゃん。イメージが」

「そうですね。そのままで行ったら、チームなのに変かも」

「だからさ、どうせだからこの際ペアで専用の揃えてみない？」

「例えば、どんなのですか？」

「伝統的な無地のショートタイツ。色違いでどう？ ブーツも合わせてさ」
すると、誠太の奴、意外にも超ノリノリだった。

「良いですねえ！ やっぱ、基本ですよね！ 無地のタイツ」

「誠太は何色が良い？」

「やっぱ黒ですかねえ、って、藤橋さんが先に決めてくださいよ」

「いや、俺は黒似合わないから、誠太が黒で良いよ。俺は……」

「赤！ 赤ですよ、藤橋さんは」

食い気味に誠太が言ってくる。先に決めろって言うておいて、全部誠太が決めちゃってるじゃん。

「あー赤のショートタイツ姿の藤橋さん、格好良さそうだなあ」

誠太の奴、腕組んで目瞑って上見上げて妄想モードに入っちゃってるよ。

「おいおい、本人がお前の目の前に居るぞ」（棒読み）

ローション タッグマッチ

山牧田 湧進

Author (Yamakida Yuushin)

Circle Gradual Improvement

URL gi.dodoit.info

個人で楽しんでいただく作品です。

個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、共有、アップロード等はしないでください。

(こちらは体験版です。)